

第21回 女子美パリ賞報告書

国吉 晶子

2001年芸術学部絵画科洋画専攻卒業

Cité internationale des arts 2022年1月3日～12月31日滞在

☆全体の要旨

- 1, コロナ禍で1年9カ月遅れの渡仏。現地はコロナ禍の終盤。ほぼ平常通りの活動が可能だった。
- 2, パリの女子美のアトリエはもったいないほどのぜいたくな環境。受賞者は副賞以外の生活費の準備が必要。
- 3, 1年間のパリ滞在を通して、作品というより精神面において大きな変化があった。欧米には日本とは別の芸術のルールがあり、それを踏襲したアーティストに成長したいという意欲を持った。

☆パリ滞在の動機

これまで海外で生活をした経験が全くなかったので、誰しもが一度は思う「パリに住んでみたい」というごく単純な動機から女子美パリ賞に応募をした。28歳から3年ほど応募したが受賞に至らなかった。その後、女子美の友人の勧めにより、38歳で再挑戦。2019年、40歳の時に受賞が決まった。

先に述べた単純な動機とともに、絵画が今後どうなっていくのかという漠然とした疑問があった。あまり人間が手を使って描かなくなるだろうが、絵画という分野自体はこれからも存在し続けるのではないか。人が描くということに限定した話をすれば、その人口は減りながらも、一定数は存在し、もしかしたら希少価値が出てくるかもしれない。

音楽・美術分野のアーティストが集まるパリの Cité internationale des arts (以下、シテ) (写真1) で、何か特別なことに挑戦したいというわけではない。普段通り生活し、絵を描く。それをパリで実行する。ごくシンプルなプランだった。仮に50年後の女子美を想像した時、「洋画」という領域・専攻はなくなるだろうと思う。帰国後、長きにわたって、その希少価値のある描き手として、未来の女子美に貢献したいということをも動機として面接審査で述べた。

また個人的なエピソードになるが、応募回数を重ねるごとに、だんだん自分を飾らなくなった。リラックスして臨めるようになった。選考委員より「海外に、とくにパリに興味があるなら、なぜ今まで行ったことがないのか」と問われ「やはり、女子美パリ賞で行きたかった」と返答した。



1, シテの外観

☆自身の作品について

私は抽象絵画を描いている。抽象を選んだわけではない。よくこういう画面をわざと描いているように思われるが、大部分は頭の中から自然に発生している。14歳くらいからこういう絵を描き始め、どこまで意図的で、どこからが偶発的なものなのか、自分でも分からない。おしゃれというよりは、泥臭い。例え「そんな絵は時代遅れです」と言われても自分はこれしかできない。

当然、画面を描き進める中で行き詰ることもあるが、こんな調子で43歳まで続けた。どの作品もあまり変わらないと思われるかもしれないが、ここ20年くらいで画面の精度はぐっと上がったと自覚している。今のところ飽きたとか、辛い、と感じることもない。

☆1年9カ月の渡仏延期

2020年3月新型コロナウイルスの世界的大流行を受け、派遣が再開未定の延期となった。活動計画が具体的でなかったことが功を奏し、予定が大きく変わるというダメージはなかった。自国待機という事実を、半ば楽しむように受け入れた。シテがEU外のアーティストの受け入れを再開させたのはそれから1年半後の、2021年10月。本来ならそれと同時に渡仏しなければならなかったが、取得していたビクタービザはすでに無効となっており、再発給も停止となっていた。先に渡仏した武蔵野美術大学パリ賞の宮本さんからアドバイスを受け、同年11月、在日フランス大使館へパスポートタロンを改めて申請し、無事取得できた。

☆ビザについて

結局、大使館を3度訪問し、2種類のビザを申請したことで時間・費用は余計にかかってしまったが、フランスの滞在ビザの重要性や、その相違点を知ることができた。ビザとは外国人に対する嫌がらせではない。入国者を選考・管理するシステムだ。自国が戦争などで安定的な生活を続けることが困難な場合を除いて、人間は生まれたその国で教育を受け、仕事をし、生活することを基本的に奨励されている。「フランスに憧れて」といった感情論では3カ月以内の観光旅行が勧められる。生活に十分なお金を持参して渡航する人はビクタービザに該当する。この2種類の入国者を制限していた。世界中の往来が制限されている中、その地域にわざわざ目的を持って赴くアーティストとしての価値を証明することが必要だった。

しかし、ビザの種類を変えた途端、審査は拍子抜けするほどスムーズだった。また日本社会と比べて芸術家の地位が高いと感じた。それはなぜなのかについては、滞在中に得たこととして後で述べる。さらに現地で芸術分野に限った就労の自由を得たことは大きかった。コロナ禍でパスポートタロンの審査がやや緩かった印象はあるが、シテ側がアーティストのビザの種類を指定しているわけではないので、今後パリ賞受賞者がどのビザにするか選択できるような形をとるとよいと思う。

☆コロナ禍終盤のパリ

2022年1月3日にシテに到着。当時を振り返れば、パリの街に人が少なかったように思う。訪問自体が初めてだったので、単純にコロナ前と比較ができなかった。年末からオミクロン株が猛威を振るい始め、フランス国内でも感染者が急増していた。しかしパリ市民の生活自体は極めて平常通りだった。トランク2台に当分の食料を詰めて行ったものの、全て杞憂に終わった。スーパーには生活に必要な物が何でも売られており（お金さえあれば）自由に買うことができた。アトリエには調理器具をはじめ必要最低限の物が備わっており、レセプションに行けばスタッフが何でも教えてくれた。さらに細かいことは、前パリ賞の角谷さんに昼夜問わず質問し、非常に迷惑をかけた。With コロナという言葉通り、単に人の往来や行動が制限されているだけで、パリはひっそりとその荘厳な雰囲気を保ち続けていた。

2月15日にパリ市内で3回目のワクチンを接種し、体調に異常はなかった(写真2)。感染してたった一人部屋で寝込んだらどうしようという不安も、周囲に馴染むことで自然に消えた。街のいたるところにPCR検査場があったが、行列をなすほどではなく、薬局で抗原検査キットを購入することを勧められた。定期的に自室で検査を行い、私は運よく1年を通し感染は確認できなかった。

恐らくシテ内でも感染が相次いでいたと想像する。報告義務はなく、知るすべもないので、確かなことは分からない。真冬にもかかわらず、窓を開け放しで生活している人もいた。

ただ皆に共通することはあまり悲壮感がないこと。ルールはあつてない印象で、イベントも縮小気味ではあるが行われていた。全て自己責任ということなのだろう。自分と同じようにビザの取得が遅れているのか、一日中電気のつかないアトリエもいくつかあった。シテのスタッフ、知り合うアーティストは皆親切で、日本で報道されていたような、コロナを逆恨みしたアジア人への差別行為にも遭遇しなかった。

初めの頃は自分に自信がなく、下ばかり向いて歩いていたのだろう。よく犬や鳩のフンを見つけていた。セーヌ川は緑色に濁っており、川沿いを散歩しても異臭が気になり、座ってサンドウィッチを食べる気分になれなかった。もしかして「パリは汚い街なのか?」と落胆していた。何はともあれ、真っ暗だった日本の外側にポツポツと光が灯り始めるような心境だった。

☆制作の過程 1～3月 静かなスタート

完全に隔絶された空間で制限なく絵を描き続けるという体験は人生においてなかなかない。特に初めの頃は他にすることがない。アトリエで1日中、自分の好きなことについて考えられる。そのことをとがめられるどころか、奨励される。コロナ禍で人の往来が少ないことと、言葉がよく分からないという二重の壁の中で、1人静かに思考を深める時間を持つことができた。

私が住むアトリエのドアには「École supérieure des beaux-arts pour les femmes Tokyo, Joshibi」と書かれている(写真3)。直訳すると「女性のための美術の高等な学校、東京にある女子美」。やや恥ずかしくもあった。

シテより入居者にパスが発行され(写真4)、パリ市内の多くの美術館の入場が無料となった。シテから主要な美術館へ1時間以内に移動できる。つい「ミュゼ」は「美術館」



2, パリ市庁舎前の臨時接種会場



3, アトリエの入口



4, シテが発行する MUSEUM PASS

と訳してしまいがちだが、ルーブルは世界最大級の歴史博物館であった。日本と違って、欧州の美術館同士は企画展よりも常設展で競っている。そのコレクションからは、その美術館の意思表示のようなものが伝わってきた。また同パスを使い画材屋でも割引が受けられた。あてもなく画材を買い制作を始めた。2月24日、ロシアのウクライナ侵攻が始まった。日本にいる時よりも「戦地はここから地続きなのだ」という緊張感があった。

☆語学について

あらゆる場面において英語・フランス語の両方が必要だった。特にシテ内では英語が公用語。アーティスト同士の交流にはSNSのチャットが頻繁に活用されていた。また任意でフランス語の教室も開催されている。

事務手続きがオンラインで済まされる場合が多く、スピーキング&ヒアリングよりも、リーディング&ライティング（タイピング）の方が重要となり、何とか逃げ切った。通常、パリ到着3カ月以内にOFFI（移民局）で行われる健康診断も結局招集がかからなかった。

パリ市内の美術館は完全予約制となり、インターネットで時間帯を指定し入場券を購入する。ルーブル美術館の有人チケット売り場は封鎖されていた。マスクを必ず着用し、入口でQRコードを提示するだけで、誰とも話さない美術鑑賞が続いた。スーパーでは対面を避け自動レジが積極的に導入されていた。現金よりカードで決済する場面が多く、フランス語で値段を聞き間違えるというよくある経験もしなかった。日によっては人と全く話さないこともあった。

だんだんと街の看板や表示が分からないという日常に慣れ、勘で動くようになっていった。誰かに声を掛けられるたびに焦っていたが、分からないなら分からないなりに、すぐに何かリアクションを示すことが大事だと分かり「メルシー」と「パルドン」を繰り返していた。やや複雑な会話が必要な場面に出くわすと、片言の英語、筆談、ジェスチャー、笑顔を駆使し、おそらく相手が諦めてくれていたのだろう、沢山恥をかいた。正直コミュニケーションにおいて聞きこぼした話は無数にある。フランス語で日記を付けたり、持ち帰ったチラシを翻訳し、自主勉強を地道に続けた。

一方、これまで眠っていた細胞がだんだん冴えていくような感覚があった。これは人間が生まれながらに備わっている能力に近い。滞在後半になると、こちらも随分と冴太くなり、どんな状況でもその場に自然といられるようになった。このことは滞在中の大きな変化である（写真5）。

☆国籍やルーツ

アフリカや中東、東欧のアーティストらとよく会話を交わした。日本人と違って、自己紹介をする際に国籍や自分のルーツ、信仰について皆熱く語る。人によっては3分ほど要す。そしてその違いに興味を示す。私は日本人であり、日本在住。祖父母、曾祖父母までさかのぼっても日本人。しかも無宗教。母国が好きかと聞かれたら、分からない。自分の紹介が最もつまらなかった。



5, 筆者

一方「我こそが純粋なフランス人」と語る人にも出会わなかった。ルーツ自体がすでに個性的であり、日本人同士が年齢や学歴を気にするのは、そこでしか「差」が推し量れないからだろう。よく自分の地元について「何も無いから～」と言うが、それは外国では荒野のような状態を示す。謙遜は通じない。自分の故郷を否定することは、自身を否定することになる。

☆制作の過程 4～6月 迷子という冒険

最も気候のよい時期。日照時間が延び、観光客が一気にパリに戻ってきたようだった。マスク着用義務も解除され、私自身もパリ市内を飛び出し、ジヴェルニーのモネの庭(写真6)やゴッホ終焉の地であるオーヴェール・シュル・オワーズなどを巡った。滞在が1年間と余裕があり、もし電車を乗り間違えたとしても「明日また再チャレンジしよう!」と思えた。実際、北駅の快速のホームに着いたものの、どの列車に乗っていいのか分からず、シテに引き返したこともあった。間抜けな話に聞こえるかもしれないが、富士山の裾野が広いのと同じで、どんな雑学もより高い場所へ上るためにいずれ必要になってくると、あらゆるトラブルを楽しめた。わざと携帯電話を部屋に残し、迷子になった。石畳につまずいて転んでも喜べた。

私は抽象絵画を制作しているから、そのジャンルに限ってみることが好きだろうと思われたりもするが、私は何でも見ることが好きだ。ミュゼさえ付けば、予習もしないままにそこへ出掛けた。さらに映画や舞台を観ることも好きだ。シテ周辺には小さな映画館や劇場がいくつもあり、いずれも歩いて行ける。仏・英の字幕についていけず、途中眠ってしまうこともあった。「無理に全て理解しようとしなさい」「冒頭から力を入れない」など、自分なりのルールを決めて臨んでいた。鑑賞後、内容について1人反芻する時間が必要だった。セーヌ川沿いをもんもんと歩き続ける帰り道は、至福の時間だった。

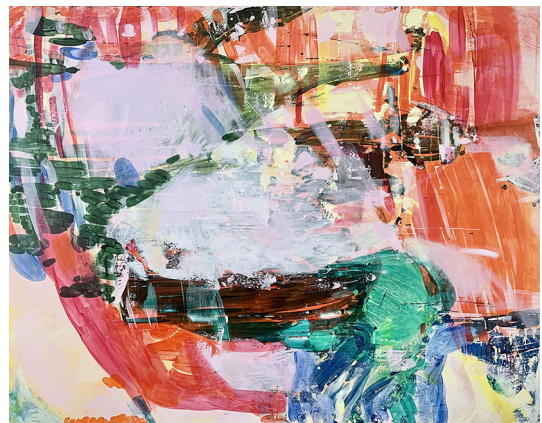
またパリ賞 OG の新津さんより「オープスタジオは帰国ギリギリではなくできるだけ早い時期に開催した方がいい」というアドバイスを受けた。

☆制作の過程 7月 オープンスタジオ

7月6日に自室でオープンスタジオを行った。これは居住するアーティストが自由にアトリエを公開できるイベントである。事前にシテへ申請し、自分が選んだ水曜日の夜(18～21時)にアトリエを一般公開できる。外部からも展示を見に来ることができる。私は“Sparkling Car”という展覧会タイトルで、パリで新しく制作した油彩画5点を展示した(写真7)。



6, モネの作品から復元された庭



OPEN STUDIO
6, JULY 2022
18-21h
Studio 2014 (Foundation Joshibi Univ., Japan)
Akiko Kuniyoshi akiko@kuniyoshi.biz

A Sparkling Car
oil painting



7, オープンスタジオのチラシ

“Sparkling Car”

あなたはこの絵の中で“車”を探すかもしれません

外側ではなく内側の視点を持ってください

私は車窓からの美しい景色を表現しました

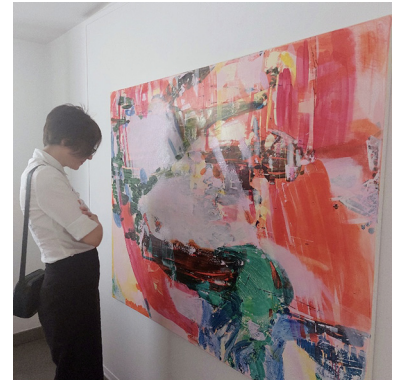
運転を続ける限り、私たちは景色を静止させることはできません

絵はスピードを緩めることなくあなたにその動き続ける景色を与えるでしょう

当日の午後はシテのアーティストの歓迎会もあり、その流れに任せるように内・外部から 50 人ほどの来客があった(写真 8,9)。パリ賞 OG の新津さん、高木さんのサポートのおかげで会話に困ることもなかった。私は日本でも行われているような、従来通りの展示を行った。理由はこれしかできないから。足りなかったものがあるとすれば、展示物そのものより、作品についてもっと言葉で語るのだと感じた。私は日本とは全く別の美術ルールの存在を感じ始めていた。それに沿っていなければ、作品として認められない。しかし来客は温かい目で見えてくれ、批判をされることはなかった。無事に終えることができ、ひどく安心した。



8, オープンスタジオの様子



9, オープンスタジオの様子



10, アトリエに続くらせん階段

☆アトリエの環境について

女子美のアトリエ兼住居は 2 階（日本式 3 階）。2014 号室。古いらせん階段の先があり、とても風情がある（写真 10）。ぜいたく過ぎるほどの良い環境。家族でも十分住める。シテ内に外部の人は入ることは可能だが、セキュリティーも問題ない。交通量の多いセーヌ川側沿いの道路に面しておらず一晩中静かだった。サンポール、マレ地区ともにパリ市内の中では治安がよい方と聞く。パリ生活初心者である私にとって非常に安心して住める場所だった。

さらに細かい話をすれば、この部屋は出入りの際にレセプション前を通過しないため、シテのスタッフらと接点が薄くなりやすい。アーティスト間の情報は主にネットだが、生の情報はわざわざとりに行く必要がある。掲示物を見逃しがちである。ついだらだらと自室で過ごしてしまい、孤立しやすいという短所がある。しかし裏返せば 1 人になりやすく、制作に集中することができる。

☆滞在 1 年の利点

私は滞在期間が 1 年のため、あらゆる面において余裕があった。周りは 2・3 カ月滞在のアーティストが多く、自国からすでに完成した作品を持ち込むケースもあるようだ。せっかくパリに来たのだから、作品について新しいアイデアを得て、思考を深める時間も必要になってくる。全ての過程において、短い滞在者ほど慌ただしくなる。さらに運搬の問題もあり、大きいサイズの作品は帰国時に破棄せざるを得ない。分野にもよるが、通常のパフォーマンスをみてもらうことは難しいかもしれない。それに比べて、女子美パリ賞の 1 年という猶予はぜいたくに感じた。

やろうと思えば、年に 2 回開催することもできる。失敗してもやり直しが効く。パリの春夏秋冬に合わせて、自分の制作の過程を記憶に刻める。何事もスローな私にはちょうどよかった。

☆パリの猛暑

1～3月、10～12月、シテ内は完全暖房で、寒いと覚ることがほとんどなかった。逆に7・8月は狂気を感じるような暑さだった。外は少し先が見えないほどまぶしい。22時頃まで日が沈まないため、日本の生活リズムのまましていると、調子が狂う。あまりの熱気に窓を一晩中開け放していたこともある。アトリエでの作業は朝から11時頃までしかできない。正午が近づくと、遮光カーテンで窓を閉め切った。もはや寝る以外に室内でできることなどない。少し暑さがやわらいだ夕方から出掛け、近くの美術館や商業施設に涼みに行くと、同じような目的の人が大勢いた。年々パリの夏の気温が上昇しているのだから、アトリエにクーラーを設置することを提案したいが、これ以上環境が良くなると居住者が全く外出しなくなるという別の危険性もある。

☆制作の過程 8月 ベネチア

ベネチアの ECC (Europe Culture Center) でイタリア、フランス、ドイツ在住の女子美卒業生有志によるグループ展に参加した(写真 11)。さらに日本からイタリア研修にやって来た女子美在學生と合流し、現地で交流する機会を得た。「海外経験を語ってください」と言われても、まだたったの8か月で、紹介できるようなネタはなく、現在のシテでの生活の様子などを写真とともに紹介した。



11, 真夏のベネチア

在校生と今の自分の年齢差は約 20 年。「学部を卒業と同時に『作品で食べていく!』と作家宣言をすることを私は個人的にお勧めしない。一部の秀でた人を除いて、あまり長続きしないからだ。焦らず「ため」のような回り道の時間を作った方が後々役に立つことがある。それは人によって大学院へ進むことや、留学することかもしれないが、私にとっては一見芸術と全く関係のない分野で夢中になって働いてみることだった。もし仮に就職活動で失敗をしても、非正規でも、美術と関係なくても、思い切って飛び込んで働いてみるといい」とエールを送った。

☆なぜ今パリなのか?

「なぜ今パリなのか?」という疑問は周囲からも聞かれたし、常に自分自身の中にあった。将来を見据えて、今の美術の流れを学ぶならアメリカやドイツの方がいいと聞く。しかしどの国にも長く滞在したことはない私にとっては比較しようがなかった。「とりあえず日本の外へ!」という単純な動機で飛び出したが、自分の作品がやや後衛的であることや、パリという街自体の華やかさを理由に挙げるとすれば、最初に訪れる街としてパリは正解だった。パリの美術館をいくつか回れば、ここは戦後からその少し後まで、芸術の最先端の街であったことが伺える。印象派はパリの最後の大きなムーブメントだった。それらを見てただ模倣するだけの人もいるだろうが、多くのアーティ

ストはそれらを超えなければならないと感じている。今のパリは、さらにその先へと模索を続ける一つの芸術都市であり、訪れる価値は十分にある。

流行とはある一つの完成形に向かい、一時的にダイナミックな動きを見せるが、やがて終わる。それに対して、常に少し足りない状態でないと、また新しく生まれてくるムーブメントに対応できない。どんな状況でもややルーズでいることが大事かもしれない。

☆フランス国外への旅行

シテを拠点に隣国への往来は自由と言われても、当初はパリを出る勇気がなかった。4月にシテ内の友人から、「フランス語が分からないのにフランスで生活できているのだから、イタリアに行っても同じじゃない?」と言われ、気持ちを切り替えた。グーグルマップがあれば、迷子になることはない。美術館に入って出てくるだけなら、大した語学も要らないとフランスを飛び出した。運よく2022年はベネチアビエンナーレとドクメンタの開催年。憧れの展覧会を初めて訪れることができた。

ただ、何もかもが新鮮というわけではなかった。単純に年齢を重ね、持っている情報量が増えたことで「これは何かの焼き直しでは?」と既視感を持ってしまうこともあった。おそらく古今東西、普遍的なものがあるのだろう。日本人は欧州独特のものに目を奪われ、同じように欧州の人も日本独特のものに惹かれる。今回のドクメンタは、ディレクターがインドネシア人だったせいもあり、展示内容は非常にアジアティックだった。今の私の能力では、それらを理解し、そこから新たな文脈を読み取ることはできなかった。

何事も「行った」「見た」は簡単である。それらをそしゃくし周囲に広く説明することが難しい。今回は各国へ出かけてみることで、脳内にその場所や展覧会ごとのフォルダを作成することができた。後から得た情報をそこに放り込み、更新していけばいい。

☆国際的な作家とは

国際的に活躍する作家は、芸術家というより実業家のように見えた。資金や場所を常に食欲に求め「ハイ、ここに作品を置きました」ではなく、それらを取り巻く人や環境までも一から作り変えているように見えた。分かりやすい例として、パリのパンテオンのキーファーの常設展示(写真12)、ベネチアのサン・ジョルジョ・マッジョーレ教会のアイ・ウェイウェイの個展を挙げる。好みではないが、深く心に残った。仮に、展覧会ごとに想定される「枠」のようなものがあるとしたら、ゆうにそれを超えるものを提示していた。考える次元が違い過ぎていた。



12, 史跡と作品の境界が曖昧に

パリとベネチアに共通する点は、歴史が身近にあること。常にその歴史と対峙するものとして現代の作品があった。先に述べた2つの展示は、いずれも歴史建築物の中で執り行われている。どちらも歴史遺産に負けていない。見ている者の歴史的解釈さえも変えようとするほどのエネルギーを感じた。

よく日本人はルーブル美術館で本物の絵画を目の当たりにすると、稲妻のようなひらめきが降りて来て、その人の中でとてつもない変化が起こるのではないかと期待する。もちろんそういう人もいるだろうが、脈々と続いてきた歴史の中で自分を静かに捉えられるようになる、ということだと思う。「われわれはどこからやってきたのか？」という謎を解き明かしてくれる。アーティストは、そういう過去を踏まえて今どうするか、ということが問われる。

これからは人でないものが絵を描き、そういったものが展示室に並んでいくだろう。人間が描いたものはいい意味で「あら」がある。流行を真似てみたもののうまいかなかたり、加齢とともに筆致が雑になったりする。作品から作者自身の人生の浮き沈みを感じられる。秀作の抜粋のみが日本へ巡回でやって来たりするため、そういった一連の流れをつかめない場合も多かった。有名作家の意外な作品に遭遇するとひどく胸を打たれた。そんな「あら」さえも AI は習得していくのだろうか。

☆生活費について

往復航空券、海外旅行保険、渡仏前の準備なども含め、生活費は副賞の約2倍が必要だった。円安、物価高騰もあり予想をはるかに超えた。2013年に女子美術大学同窓会から授与された「佐野ぬい賞」の副賞をそのまま活用した。旅行以外は自炊を中心とし生活費を抑えていた。さらにランドリー代を惜しみ、自室で何もかも洗濯していたが、とうてい支出に追いつかなかった。いちかばちかで電車で飛び乗ったせいで、切符の買い間違えによる違反金を二度も徴収された。違反金だと思いと落ち込むので「フランス国鉄の入会金」「更新料」と呼ぶことにした。運よく滞在中スリに遭遇することはなかった。

☆制作の過程 9・10月 セーヌの光

パリにある美術館とギャラリーを全て回ってみようと意気込んだが、無理だと悟った。まるででもぐら叩きゲームのように、催しが次から次へと入れ替わるからだ。展示が変わるたび、その場所の雰囲気ガラリと変わる。全てを理解するなど不可能。パリという街は常に動いていた。

ルーブル美術館別館、ル・アーヴル、ストラズブルなどを見学して巡る。パリ賞 OG の保科さんを頼り、ピレネー地方の彼女のアトリエにも出掛けた。

映画監督ゴダールの安楽死が話題となり、パリの映画館（写真 13）で彼の特集が組まれ、足しげく通った。一方、語学力をほとんど必要としない、コンテンポラリーダンスやクラシックコンサート心地よいと感じるようになった。日本にいる時とほぼ同じ状態で、イスに深く座ってのんびり鑑賞できる。



13, パリには歴史ある映画館が多い

ある時、シテ近くの劇場で、ピアノの世界コンクールの最終選考会が開催されていた。そこである若い中国人ピアニストの演奏を聴いた。「鍵盤が壊れるからやめて！」と叫びそうになるような大胆な演奏だった。欧州の観客はストレートにその感想を表現する。つまらない時は途中で堂々と席を立つし、靴で床を激しく鳴らす。演奏終了後、それを聴いた各国の観衆からの拍手がしばらく鳴り止まなかった。先のビザの項目でも述べたが、特別な能力を

持ちフランスに有益なものを与えてくれる研究者・芸術家などに対してパスポートタロンというビザが発給されている。「有益な」とは、こういう人を指すのだと思った。

またこの頃、オルセーの夜間開館へよく出掛けた。最初は汚いと思っていたセーヌ川は、その濁りのせいなのか、夜になると街灯が映り込み、ゴッホの絵のように水面がキラキラと光っていた。秋になり、だんだんとパリの景色を美しいと思うようになった。

☆制作の過程 11・12月 パリの匂い

シテからシャルルドゴール空港までは約 1 時間。そのほかパリ市内の主要な 7 つの鉄道の駅までいずれも 40 分以内で移動できる。次第に自分は今、ヨーロッパのど真ん中、世界の大交差点にいるような気持ちになっていった。

この頃、制作はいつさい放り出し、どんどん出掛けた。行動範囲が広がるにつれて、シテのアトリエはだんだん探検基地

のような存在と化した。出掛けては戻り、また出掛けた。アトリエはエネルギーを安全に注入する場所だった。日本にいる友人から「パリにいないパリ賞」と揶揄された。

パリは私の故郷でも何でもないのに、「パリに帰る」という言葉を自然と使うようになっていった。ドイツに旅行した時は、目や耳を凝らさなければその文化や習慣の違いに気付かなかったのに対し、帰路になると、フランス語のアナウンスが聞こえ、なじみのある地名がバスの上に表示されているのを見つけ、パリ特有の匂いがした途端に「無事に帰ってきた」とひどく安堵した。

このパリ特有の匂いの源とは一体何か?自分なりに考えてみた。きっと、おいしそうな焼き立てのパンの匂いと、路上の鼻をつくような尿の臭いが混ざった、新しい「におい」だと思う。決して好きなものではないが、このにおいが漂ってくるとほっと安心した。パリを出て、パリに戻るたびに、どんどんパリに愛着が増していった。

☆バカンスという学び

よく日本人から「シテに入居すると、どんないいこと(特典)があるのか?」と聞かれる。シテ自体を芸術学大学のように捉え、入居すれば何か特別な美術の授業を受けられるのでは?と想像する人が多いように思う。もちろんシテと女子美がそれぞれ発行する招待状と派遣証明書のおかげでビザが発給され、その期間は更新の心配もなく、アトリエと生活環境を整えられる。そんな最高の恩恵がある。加えて言うならば「自由」だろうか。

私は 90 年代後半を女子美で学生として過ごした。大学は縛りが緩く、とても寛容だった。学ぶべきものの大半はアトリエの外にあり、日々それを見つけては一喜一憂していた。アトリエは常に帰るべき場所、守ってもらえるよ



うな場所だった。シテでの生活は、まさにその女子美生活の延長線上にあり、たった1人で女子美5年生を送っているような気分だった。

シテで知り合う各国のアーティストらは、そんな自由をいかに謳歌するかに知恵を絞っていた。うまく言えないが、彼らにはどこか余裕があった。堂々と遊んでいた。まるで自分がガイドブックをうのみにし、あくせく観光名所を回る貧乏性ツーリストのように見えた。

フランスでは小学生から大人に至るまで、万事において受け身でないことが当たり前であった。先にビザ取得の際に、社会の中で芸術家の地位が高いと述べた。芸術家は思想家であり、作品を通して自身の考えを示し、多くの人に影響を与える。観衆のさらなる想像のスイッチを押す。だから尊敬されている。

一方、日本ではアーティストとは、ただ絵が上手い人と思われがちである。上手な絵が必要な場以外では、あまり役に



立たないと思われているため、あまり尊敬されない。戦後から現在に至るまで、近代美術の教育に力を注いできたせいもあるが、多くの鑑賞者の価値観が印象派で止まっている。アートを知的な遊びとして発展させていく土壌がない。

本来アーティストを育成させるはずの教育現場でも、学校側のお世話が過ぎるように思う。生徒側は、お金を払い学校に通いさえすれば、何かかが習得できる、何かが変わる、と夢を抱くが、そこに「自力で」という注釈が必要だと思う。学校はあくまできっかけを与える場所に過ぎない。効率のよい学び方は人によって違うし、興味を持つ対象も、その深さも違う。フランスは生徒の国籍や宗教の違いの幅が大きすぎて、単に同じようなカリキュラムでは收拾がつかないだけかもしれないが、各々が最良の学習方法を見つけ実践しているように見えた。日本人は休日にも学び、働く。それを真面目と呼び、称える節がある。恋愛さえも邪悪なものと思えがちだ。本来、学びと遊びは表裏一体。フランス人はバカンスを真剣に満喫していた。バカンスこそが人生の学びなのかもしれない。

☆精神面の変化

作品そのものにおいては一見変化はないのに対し、精神面においては大きく変わった。簡単に言えば、受け身でなくなった。他人からの評価をあまり気にしなくなった。人を傷つけることはよくないが、生きている限り誰かを傷つけてしまうことはある。つまり、人から嫌われることがあっても、それが怖くなくなった。もともと完璧主義ではなかったが、完璧などありえないし、何事も適度に抜けている方がちょうどいい



と思えるようになった。信号無視など、日本人としては少々マナーが悪くなったかもしれない。

さらに欧米特有の美術ルールのようなものの存在に気づき、それを踏襲したアーティストになりたいと思うように

なった。アメリカの事情が分からないため想像になるが、そのルールとは日本のアートシーンで語られる作品コンセプトとは次元が異なるように感じた。欧米のアーティストを徹底的に模倣しろということではない。そのルールについて理解しないと、ここではアーティストとして認められない。もっと言葉によって作品を説明し、自分自身に価値付けをしていかなければならない。この仕組みについて、もっと深く学びたいと思うようになった。

つい日本人は海外の展覧会やアートフェアにやって来ると、最新のことを物欲しそうに探してしまう。現在、日本国内で飽和状態となっているアートビエンナーレや芸術祭は、海外のものを徹底的に研究し、うまく取り入れた結果だと思う。しかし追うべきは「最新」と膨大な「過去」。常に歴史を振り返り、精査し、今の自身の作品と比較していくことが重要だ。

☆逆カルチャーショック

日本の生活に戻り、逆カルチャーショックを受けている。パリ生活に慣れるまで半年かかったにもかかわらず、飛行機を降りて日本在住の日本人に戻るのは一瞬だった。母国語である日本語を忘れることは決してないだろうと思った。単にマスク生活に戻ったからというわけではなく、日本人皆が「似ている」と思った。笑顔の人が少ない、電気が明るい、ゴミが落ちていない…言い始めるときりがない。地元のテレビニュースを見ていたら、どこかの山間に住む単一部族の間で起こっている出来事を読み上げているようだった。

私の職場は地方の美術予備校であるが、机に積み重ねられている様々な大学のパンフレットに目を通していると、仮に今 18 歳だとしたら、正直どこへも行きたくないだろうと思った。「お決まりのコースからドロップアウトしてみたら？」と無責任な言葉を生徒にかけてしまいそうになる。日本の学校は、似た考えの人を大量に育成し、いっせいに世の中に送り出す養成所のようなものであると感じた。ただ、途中どんなに失敗しようとも、ラスト 1 回の試験でつじつまが合うという受験システムのよさもあると思う。また周囲に気を遣い、調和を大切にする精神は素晴らしい。皆が自ずと日本と海外の違いを認識し、自分に合った方法で学んでいくしかない。

☆年齢について

シテ滞在時、私は 43 歳であった。過去のパリ賞受賞者と比べても年齢が高い方だと思う。シテ内で知り合う日本人は 20・30 代で、明らかに世代が違った。ただパリでは歳を尋ねられる機会は少なく、シテ内でもアーティスト同士の立場はあくまで対等。皆フランクに接してくれた。あくまで見た目の印象であるがシテ全体を見渡せば、私よりも年上のアーティストは大勢いた。

本来、女子美パリ賞は、卒業後 5 年～10 年の、少し軌道に乗ってきたアーティストをさらに飛躍させるために設けられた賞という印象がある。受賞時の年齢が若いほど、心身に受ける影響は大きく、その後の人生も一変するだろう。



一方で、自分はもうあまり変わらないかもしれないという諦めなのか、1年を通し心身ともに比較的安定していたように思う。落ち込んだり、浮かれたり、という気持ちの落差もなく、何も見てもふと冷静になる自分がいた。従来なら将来を夢見て経験を積み上げていくのに、80歳ほどの自分の姿を想像しながら、まるで逆算するかのよう「今やっておくべきこと」を探しているようだった。

日本は若く将来が長いアーティストを支援したいという傾向が強いように感じる。欧州ではどの分野であっても一概に若いということに価値を置かない。男女差がないように、年齢による差別意識も薄く、“マダム!”と呼ばれるそのニュアンスに、どことなく敬意が感じられる。パリにいて、単純に老いることが怖くなくなった。年齢に応じた服装などなく、女性たちは好きな時に好きな服を着ていた。

昨今はサバティカル休暇というものも存在するらしい。ある程度年齢を重ねた上で、これまでのキャリアを見直し「一区切り置く」ことのよさもあると思う。シテには最高の環境と、膨大な自分を見つめ直す時間が待っている。今後、私の年齢を超える応募者・受賞者が出てくることを期待している。

☆今後の展望

結論から述べると、自分の専門分野が絵画ということもあり、フランスでも日本でも、自分は世界中どこにいても絵は描けるという原点に立ち戻った。パリに滞在した意味がないと言っているのではない。欧州について、知れば知るほど知らないが増える毎日だった。もっと異国で生活してみたいという未練はあるが、いつまでもこのような生活を続けていくわけにはいかない。金銭面でも限界に達した。

パリには多くの日本人アーティストが高い志を持って生活をしている。母国語でない言語を操り、習慣も違う相手と仕事をするには並大抵のエネルギーではない。国際的に活躍することを目的とするならば、パリのような芸術活動が盛んな都市、またはその近郊に住み、コミュニティーの一員となるのが近道であろう。短期滞在者はそれなりの扱いを受ける。残念ながら私の能力と1年間の滞在ではそれには及ばなかった。しかし、そんな体験を一瞬でもできたことは大きかった。

ある時、日本から届いた手紙に葛飾北斎の切手が貼られていた。それを見たシテのスタッフから「この切手がほしい」と言われた。ホクサイは西洋の文脈の中で確固たる地位を与えられ、尊敬されている。ホクサイはパリに留学したことなどないはずだ。

絵を描くのは結局1人である。どこで描くかは関係ない。特定の場所でしか作れない作品もあるが、私の場合そうではない。世界中どこにいても「ホクサイ」のように独自の世界を築き上げることができれば、自ずと海外との繋がりは生まれてくるだろう。今はそう考えている。



女子美パリ賞はその起点を私に与えてくれた。大村名誉理事長、小倉学長をはじめ多くの女子美術大学関係者の皆様、応援してくれた友人、家族に感謝を述べたい。

もう海外のアーティストインレジデンスには挑戦しないのかと問われると、そうではない。もう少し情報を深く掘り下げたいという動機で、再び全く別のプロジェクトに挑戦したいという意欲を持っている。体内にまだこの感覚が残っているうちに。

☆共同体の向こうに共同体

アーティストとして1人で生きていくことは難しい。一般的に安定した国や地域であれば、その場所に合った芸術や文化がある。そこに住むアーティストには、その都度、その程度に合った発表の場が用意されている。つまり、そこそこのレベルのアーティストには、そこそこの受け皿（共同体）があるという意味だ。古い共同体を抜け出しても、また新しい別の共同体が存在する。仮に明日からパリで再び生活ができるとしても、今の自分のレベルに合った共同体にぶつかってしまうだろう。

ベネチアビエンナーレやアートバーゼルなど国際展で私が心を奪われた作家らは、こういったコミュニティーのいつさい外にいるように感じた。一流の作家とは孤独な存在だった。

パリは世界屈指の芸術都市であるが、この共同体による現象は、パリにも、ニューヨークにも、東京にも、どんな都市にも、必ず存在する。都会か田舎かは関係ない。生きている限り常に自分の前に現れ、うっかり腰を下ろしそうになる。堀文子氏の言葉を引用するならば「群れない、慣れない、頼らない」ということ。「女子美パリ賞」という肩書に頼らず、これからも絵を描き続けていきたい。



国吉 晶子 Akiko Kuniyoshi

1979 年 高知県生まれ

2001 年 女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻卒業

2005 年 JEANS FACTORY COMTEMPORARY ART AWARD グランプリ M 賞

2007 年 女子美術大学大村文子基金制作・研究奨励賞

2009 年 第 24 回ホルベインスカラシッパ奨学生

個展 (neutron/ 京都市)

2013 年 佐野ぬい賞

2014 年 トーキョーワンダーウォール 2014 入選

2015 年 FACE2015 損保ジャパン日本興亜美術賞 入選

神戸ビエンナーレペインティング部門入賞

2016 年 藝文京展 2016 入選

2020 年 女子美パリ賞 (2022 年 1 月～ 12 月 Cité internationale des arts にて滞在制作)

公式 HP akiko.kuniyoshi.biz

